
ネギま！な世界で

有里 湊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネギま！な世界で

【Nコード】

N42330

【作者名】

有里 湊

【あらすじ】

鐘が響いた、僕らの中学の卒業式、その日僕らは新たな世界へと旅立った。もしも、願いが叶うなら何を望むのだろうか。もしも神様がチート能力付けてくれるなら何を望むのだろうか。ある者は過去の日々に想いを馳せ。ある者は未来の栄光を目指し。ある者はただ、己が生きるために。今、ネギま！の世界を舞台に戦いの火蓋が切られる！

始まり（前書き）

二次創作に初めて挑戦です。

取りあえずコンセプトはチートバトルがしたいです。

ん？ネギまであった必要あったのか？

#間違つて短編に投稿してたので、再投稿

始まり

鐘が鳴る。

一度、二度、三度。

とくに何かやることもなく、「あゝ」と口を半開きにして無為に時間を過ごす。

相変わらず男子は馬鹿なことをくつしゃべっているし、女子はバツテリー大丈夫かと不安になるほど写メを連写している。

もう一回「あゝ」と唸りながら、机に突っ伏す。残念ながら、どちらのテンションにもついていけない気がしない。

「おいおい、どーした、ちーちゃん。マリッジブルー？」

「黙れ藤崎。意味分かってたってんのか？つてか、ちーちゃん言うな」

この男、藤崎雅義はへらへらと笑って、いつの間にかそこにいた。さてはて、この男とはこの中学に入学して以来の付き合いだ。

腐れ縁だといつてもいい。

1学年3クラスあるこの学校において、3年連続で同じクラスになるのは33%の3乗でおよそ4%。

残念ながらこの学校のクラス選考基準なんて知らないが、こいつと一緒にクラスであるというだけで、少なくとも純粹成績ランク分けでないことは確かだ。

もちろん、間違つてもこの男の方が成績がいいなんて事実はない。

「それは置いといて、あれに混ぜられてなくていいわけ？」

きゃぴきゃぴ騒いでいる女子の方を指しながら言う藤崎。

「ふん、どうせ半分以上地元の高校だろ。またすぐ顔合わせるのになんでわざわざ撮らなきゃいけないんだよ」

僅かばかりに、良い成績を持っており、多少遠くにある進学校に通うこともできる。

だが、わざわざ遠い学校に進学する気はなし。

そう言うわけで大半のクラスメイトは地元の高校にエスカレーター式に進学していく。

まあそれはどうでもいいのだが、こいつ3年間、マジでちーちゃんで通しやがった。

まったくもって、むかつく。

「いや、そーいうんじゃないくて、女の子の中に入らなくても良いのかって」ト

「・・・何が言いたい？」

「もう。ちーちゃんったら分かってるくせに」

僅かばかりの殺意を覚え、拳をギュツと握りしめた。
本気で死なないかな、こいつ。

鐘が鳴る。

一度、二度、三度・・・。

「あ、あの・・・!」

「ん?」

緊張して固まった拳をほぐし、やけに気の弱そうな声の方を向いた。

やけにニヤついた奴の顔が見えたが、もはや何か言う気もない。

振り向いた先には、小柄な娘がいた。

しつとりと滑らかな黒髪が、目を隠してしまつて俯いているようにも見える。その手には微妙に立派なデジカメを携えている。

「写真、良いですか・・・?」

一瞬脳内に検索をかけて、彼女の名前を思い出す。

小野崎祥子。同じクラス。写真部所属。

なる程、微妙に立派なデジカメを持っているのも頷ける。

大方、クラスの写真を撮り回っているのだろう。

まあ、わざわざ撮る気はないが、求められて断る気もない。

「ん、いいよ。ピースでもすればいいの?」

「え、いや・・・いえ、お願いします・・・」

「?」

何か落胆したような彼女の様子を不思議に思いながらも、笑顔で

ばしゃつと一枚。

「……ありがとうございます」

彼女が律儀に頭を下げた瞬間、いつの間にか回り込んでいた藤崎がひよいとデジカメを取り上げた。

「おい……」

「きゃっ！」

なに子供みたいな事してんだ。

そう言おうとしたところ、カメラを取り上げられて一時的に混乱に陥った彼女を、よりにもよって突き飛ばしやがった。

慌てて立ち上がり、此方に倒れ込む彼女を受け止める。

「大丈夫か!？」

倒れる椅子の音。

静まり返る教室。

僕の胸の中にいると知り、擬音が聞こえたと思うほど真っ赤になる女の子。

眩いフラッシュが目を焼き、シャッターを切る音が聞こえた。

ん?なんか変なの混ざってない?

見ると、今し方奪ったカメラを構え、親指をつきだしている藤崎がいた。

何がグッジョブだ。

文句を言おうとした瞬間、今度は女子の黄色い悲鳴に圧倒され口を閉ざした。

なんだよ。

そして、こちらに向け写メ連写するのめやめろ。

小野崎など、あうあうと口の開閉を繰り返している。

騒然とする教室の中、中には鼻から愛を垂れ流している奴すらいる。

何がレズ乙だ！

何度も言うが、僕は男だ！！

鐘が鳴る。

一度、二度、三度、四度……。

これが僕らの卒業当日。

この中学、そしてこの世界との別れの日だった。

暗転。

気がつくと、見知らぬ場所にいた。

何処までも白い空間。

壁はなく、天井はなく、床すらない。

もはや自分が立っているのか浮いているのかさえ分からなかった。

気持ち悪い。

まるでどうにかなくなってしまいそうだ。

この真っ白な世界で、少しでも違う色がみたくて無意識に辺りを見渡した。

すると、すぐ隣で人の気配があるのに気づいたいた。

小野崎祥子が、まるで意思を感じさせず、ぼおっと突っ立っている。

「ちょっと、小野崎さん!？」

慌てて彼女の体を揺すった。

何度か揺らされるままになるが、次第に目に光が戻り始めた。

「え、なななな何!? 何で?」

「いや、ちょっとは落ち着こうよ」

僕より少しだけ背の低い彼女は、酷く狼狽した。

無理もない。こんな真っ白い空間にいるのは、誰だって嫌だ。

未だ混乱する彼女の目の前に、僕は人差し指を突き付けた。

びくりと彼女の肩が跳ねる。

しかしそれ以上騒ぐこともなく、突きつけられた指を凝視していた。

静かになったのを見計らって指を下ろす。

以前、某ラノベで読んだ人を落ち着かせる方法を使ってみたのだ。

「落ち着いた？」

ありがとう空目陛下。

あなたの知識は確かに役に立った。

「・・・うん、あの、ここ、どこですか？なんで私、こんなところに？」

答えてあげたいが、残念ながら僕もその答えは持っていない。

「ごめん。僕にもわからないんだ」

ふと、周りを確認してみると、むしろなんで気づかなかったんだと思うほど人影があった。

その周りの人影を数えてみると、僕たちを入れて32人。

それは僕たちのクラス人数とまったく同じだ。

最初は彼女のように、意識はなかったのだろうと思う。

しかし、覚醒していくものが一人二人。

増えていくにしたがって騒がしくなっていく。

そしてこの訳の分からない場所に、それがやってきた。

よつこそ。この最低な世界に

それは、果たして何であつたのだろうか。
それは、男に見えた。女に見えた。老人に見えた。若者に見えた。
子供に見えた。

それは、人に見えた。人に見えなかった。動物に見えた。動物に
見えなかった。無機物のようで、有機物のようだった。
もしかしたら何も見えていなかったのかもしれない。

君達は、選ばれた。

いきなりそういわれても困る。

選ばれた。何が？

このクラスが。

しかしいったい何に？

奇跡の対象にだよ。

君達とはある世界に行つてもらつ。

剣と魔法の世界だ。

君達はそこで好きなように冒険できる。

嬉しいだろ？

嬉しいはずなんて無い。

現代のもやしつ子がそんな世界に行つたて、冒険なんて出来るは
ずがない。

せいぜい華々しい最後を飾るくらいだろつ。

もっとも、それすらも怪しいが。

勿論、君達には特典がつく。
その世界で生きられる程度に肉体を強化し、その身を不老に
してやるう。

そして、何でも好きな能力を付けてやるう。

歓声が上がった。

「何でも!？」

「無限の剣製でも、王の財宝でも?!」

嬉しいのか？

まるで正気とは思えない。

勿論、制約はある。

不死は願えない。

時間を戻す能力は使えない。

世界を越える能力は使えない。

君達の中で、同じ能力は持てない。

この限りにおいて一つだけ能力を得ることができる。

「一つだなんて少なすぎる・・・!」

少ないか。

ならば、こっつしゅつ。

能力は三つにすることができ。
ただしその場合は、能力はこちらで決め、自身で選ぶことは出来ない。

「異世界だとか、能力だとかはどうでもいいからとつと俺たちを帰せよ！」

お、僕と同意見の奴がいる。
良いぞ、もつと言え。

残念だがそれはできない。
なぜなら君たちは現実にはすでに存在しないからだ。
今のその身体も仮初めのものに過ぎない。
だが安心しろ。
体は異世界に行くに当たって、君達の記憶から姿が再構成される。

そう、より強靱にな。
だが、帰りたいというのならそれも良いだろう。
実は君たちの中で最後まで生き残った者には、あらゆる願いが叶えられる。
あらゆる制約を、法則を無視し、総て願いが叶えられる。
帰りたいならそう願えばいい。

「最後まで生き残ったら・・・？」
それはまるで・・・。

さあ時間だ！

願え、自らが思う最強の能力を！

そして自らの最強を示せ！！

「待て！！」

それはまるで、殺し合いをしると言っているようなものじゃないか！！

僕はそれに向かって駆け出した。

それに右手を伸ばす。

届け。もう少し、届け、届く……。

しかし、その手が届く瞬間、まるで指先から蒸発するように、光の粒と成っていく。

消えていく。指。手。腕。

もう、間に合わない。

どんと消えていく。止まらない。

もはや僕は諦めて目蓋を閉じた。

「だめえ……！！」

その時、僕の左手が温かさに包まれたのを感じたのだった。

始まり（後書き）

主人公は男の娘。容姿は次回辺りにも。

だけど、主人公が人の好意に鈍いのはテンプレ。

更新は少々不定期になるかもしれませんが

墜落（前書き）

ネギまネギまと言いつつ、魔法先生ネギま！の魔の字すらまだ出て
いません。

もしかしたら最後までネギは出ないかもしれませんが。
別にアンチとかそういうわけではないですけども。

墜落

さわさわと、風が頬を撫でる。

熱くもなく寒くもなく。

ただひたすらに気持ちいいこの場所で、いつまでも眠っていたか
った。

腕の中にある、温かいものをぎゅっと抱きしめた。

「っあ・・・」

・・・なにか、聞こえたような気がする。

恐る恐る、睡魔に身を引かれながらも、ちらりと目を開けてみた。

至近距離で目が合う。

彼女、小野崎祥子はリンゴのように顔を真っ赤にしていた。

なぜ向き合って寝ているのか。

いや、それならば、まあ多少の問題があるにしても、多大な問題
ではない。

本当の問題は、そう。彼女が僕の腕の中におさまっていることだ。

「！！&\$\$\$\$k”」

飛び起きた。

何を推しても飛び起きた。

ずずずずずず・・・と、土煙を立てながら後ずさる。

「う、ごめん、小野崎さん！そんな気はなかったんだけどいやいつの間に抱きしめてたていうか悪気はなかった・・・いやいや言い訳じゃなくてももちろん責任は取るつもりだけれどもただ本当に覚えは無いていうかももちろん君は可愛いしまったくちつとも他意はなかったと言えはもしかしたら嘘になってしまったりなかつたりするかもしれないけれども・・・って、本当にごめん！！」

「あう、・・・うん」

自分でも何を言っているのかわからなくなり、慌てふためいて真っ赤になつた小野崎さんに頭を下げた。

・・・というか、これはいったいどういう状況なのだろうか。目覚めたらクラスメイトの女の子を抱きしめていました。

・・・なに、このおいしい状況。

しかし、問題はやはり彼女を抱きしめているに足る理由もなければ、どうしてそうなつたのかもわからない。

見れば小野崎さんは真っ赤になりすぎて、今にも泣きだしてしまいきそうだ。

昔、じいちゃんが言っていた言葉を思い出す。

『いいか、ちい坊。何があつてもおなごを泣かしちゃなんねえぞ。そんな奴は男の風上にもおけんからな』

ごめんじいちゃん。

この女の子は今にも泣きそうです。その言いつけは守れそうにあ

りません。

もう、今にもぼろっと涙が・・・

「よかった・・・」

・・・こぼれそうで、って・・・え？

「ずっと眠ったままで、もう起きないんじゃないかって、私・・・」

ぎゅっと、今度は彼女から抱きついてきた。

今度は僕の顔が真っ赤に染まる。

彼女は、まるで零れ落ちる涙を押しつけるように、僕の胸に顔をうずめた。

「起きないって、僕が？なんで・・・？」

「え、覚えてないの？」

ドクンと心臓がなった。

覚えていない。いや、覚えている。

まるで夢のようなこと。

どこか出来の悪い小説のテンプレにありそうな出来事。

思わず右手を見た。

確かにあの時、右手は光となって消え去った。

むしろ僕ごと消えたような気すらした。

「生きてる？いや、夢じゃなかったんだ」

そして、ようやく周りの様子に気が付いた。

穏やかな天候。穏やかな風。揺れる梢。

どこを見回しても木しかない森の中。

見覚えなどあるはずもなく、本当に異世界に来たのだろうか。

「うん。でもよかった・・・本当に、よかった」

きゅっと、僕を抱きしめる彼女の腕に力が入る。

僕もそれに応え、彼女を・・・

『オハヨウゴザイマス!』

「きゃあ!(うわっ!)」「」

いきなり聞こえた声に僕たちは思わず身を離した。

あわてて声のした方を向くと、大きさ30cmほどのクマのぬいぐるみがフワフワと浮いていた。

「く、クマさん!?!」

『ソウデス、ショーコサン。先程プリデス』

「あ、はい、先程ぶりです」

茶色っぽい体、目の代わりに黒いバツテンが縫い付けられている。

「し、知り合い?」

こんなぬいぐるみとお知り合いな子だったのだろうか。

『ショーコサンニハ、先程挨拶二伺イマシタ』

「あいさつ?」

『ソウデス。初メマシテ。私ハ、ナビゲーターヲ務メル、クマデス』

くま・・・確かにクマには違いない。ぬいぐるみだけど。

『ソレデハ、サツソク。マズハ確認カラ。名称：七瀬千尋。性別：女。年齢：15歳。通称：ちいちゃん。デ、間違イアリマセンカ？』

「待て、その不思議生物的物体。僕は男だ！」

『?・・・名称：七瀬千尋。性別：女・・・』

「何度言い直したって僕は男だ！」

すると、そのぬいぐるみは挙動不審にあたふたとし始める。

『コチラノ記録デハ女性トナツテイマス。少々才体ヲ確認シテイタダイテモ?』

「確認するも何も男だぞ」

『イエ実ハ、コノ世界ニ来ルニ辺リ、記憶ヲ基ニ身体ガ再構成サレマシタ。アナタハ意識ガアリマセンデシタノデ、他人ノ記憶ノ影響ガ強ク出テイマス。友人ニ女性ト思ワレテハイマセンデシタカ?』

ああ、なんかそんなことも言ってたなあと、思い出すと同時に、いくら言っても僕のことを女の子扱いするクラスメイトが頭に浮かんだ。

嫌な冷や汗をだらだら流しながら下半身に手を伸ばす。

スカッ

何の抵抗もなく、そこを通り過ぎた。

「嘘、だろ・・・?」

「え?七瀬君?」

を真っ赤にして謝っている。

『アー、取リアエズ話ヲ進メマス。千尋サンハ能力ヲ選択シマセンデシタノデ、主ガ選ンダ3ツノ能力ガ与エラレマス』

「ああ、うん。そんな話だったね〜」

もはや投げやりである。

『マス、ゲーム参加者ノ共通能力トシテ【体力】【魔力】【筋力】【素早さ】ノ共通初期値トシテ1000ポイントズツ与エラレテイマス。コノ値ハ経験ニヨツテ”増減”シマス。減ルコトモ在ルノデ氣ヲ付ケテ下サイ。マタ自分ノステータスハ意識スルコトデ確認デキマス。ソシテアナタニ与エラレタ固有能力ハ【全才能保有】【成長限界突破】【経験値増加】ノ3ツデス』

「うん、りょーかい」

『マア、先程シヨールコサンニモ説明シタノデ聞カナクトモ良イデスガ。

兎二角、続ケマス。コノゲームノ目的ハ生き残ルコトデス。最後マデ残ツタプレイヤーニハ、アラユル願イヲ叶エル権利ガ与エラレマス。期限ハ在リマセン。コノ世界デ平穩ニ過ゴスモ良シ、冒険スルモ良シデス。

ソシテ最後ニ、プレイヤーノ誰カガ脱落シタ場合ハ私ガソノ都度オ伝エシマス』

ゲーム・・・生き残りを賭けたデスゲーム。これはやはり変わらないのか。

『ソレデハ、何力質問ハアリマスカ?』

「・・・ここは、どんな世界?」

『ソレハ自分デ御確認下サイ。デハ、サヨウナラ!!』

それだけ言うと、ポンという煙とともに消えてしまった。

「なんなんだよ、いつたい・・・?」

結局何の答にもなっていない。

「・・・私の時もあんな感じだった」

なるほど、おちよくっているのだろうか。

十分にありそうな話だ。

もう、どうすればよいのかわからなくて、沈黙が降りる。

頭がこんがらがっていた。

いつも女の子の子男の娘とか言われてたけど、本当に女になっ
てしまうなんて。

見たところ、背も腕のリーチも変わっていない。だけど全体的に、
わずかに華奢になってる気がする。胸は、心なしか有る程度の膨
らみ。そして何よりあそこがなかった。

・・・もうやだ。死にたい。

そんな感じで鬱蒼とした・・・というかたぶん、おそらく瘴気で
も出していたのではないだろうか。

そんな感じで落ち込む僕に、小野崎さんはしばらく躊躇うように
した後、話しかけてきた。

「あ、あの、七瀬君。その・・・さつきはごめんなさい。びっくりして、私なんかよりずっとショックだった七瀬君のことも考えないで私・・・」

俯く。もはや言葉にもできず、まとまらず、だけど確かにこんな僕を心配してくれていた。

何をやっているんだろう。

今更ではあるが、小野崎さんは気が弱い。

どのくらい弱いかといえば、やはりクラスでも自分から喋るなんてほとんどなく、やはり集合写真なんかには常のごとく端っこにいるような・・・どこのクラスにも一人ぐらいはいるんじゃないかと思われる気の弱さ。

・・・これは特別気が弱いと言えるのだろうか。

兎にも角にも、気が弱い引つ込み思案の小野崎さんが勇気を振り絞って心配してくれている。

何をやっているんだろうか。

女の子に心配かけて、僕は何をやっているのだろうか。

「小野崎さん。こちらこそごめん。なんか変に気を使わせちゃって多少の無理をして笑顔で言った。」

「そ、そんなんじゃないか!」

女の子に脱がされたらショックだよねとか、女の子になっているなんて私もショックだったとか、私よりかわいいとか、同性はダメとか、本人の方がショックだったのにとか・・・

「・・・ぷっ」

「え・・・？」

慌てふためいて、もうたぶん、自分で何を言っているのかもわからないで口に挙げているその様子が可笑しくて。思わず笑ってしまった。

「七瀬・・・くん？」

「ごめん、あんまり必死なのが可笑しくて・・・」

微妙に引きつりながら言った言葉に、彼女の頬がひきつった。

「え・・・ちょっと、ほ、本気で心配してたのに・・・」

「ご、ごめん・・・んぷぷ」

「七瀬君！」

「ぷっ、あははは・・・」

我慢したけれども、なぜか耐えられなくなって声を出して笑い出してしまった。

「・・・ばか」

それだけ言うと、小野崎さんもクスリと笑った。

僕の声に釣られるように、気が付くと二人で訳もなく笑っていた。

本当に、こんな時に何をしているんだろう。

横転。

それからしばし、僕たちは再び横になっていた。

遠い空の雲が流れるのを二人で見ている。

まるで吸い込まれそうな青い空で、寝転がっているとどこが上か下かもわからずに、空に落ちていくような錯覚にさえ陥る。

綺麗な空だった。

さあつと、風が撫でる。

気持ちのいい風だ。

なんとなく、大空に向かって手を差し伸べてみた。

華奢。

白くて細い指。何の苦勞も汚れも知らぬように見える手だった。もちろん昨日まではこんな手じゃなかった。

男の手としては、少しばかり軟ではあったが、こんなところにも変化が表れている。

たしかに、ショックだった。

女の子になったこともそうだが、未だに僕のことを女だと幻想しているクラスメイトにも少々辟易した。

だけど、そう、思いつきり笑って、なんかどうでもよくなった気がする。

そう、気がするだけ。
だけど今はそう思い込んでおくことにした。

「……これからどうしようか？」

僕と同じように、隣で空を見上げていた小野崎さんに話しかけた。

「え……と、わからない、です」

「そうだね」

これからどうするのか、どうしたいのかを思いを馳せた。

「僕の家はさ。一人っ子で兄弟とかもないけどさ。ちょっと過保護な母さんがいてくれて、休みの日はもう、ぐうたらしてるだけの父さんがいて、ほんと、多分どこにでもような親子だったんだと思う」

「うん……」

「僕ももう子供じゃないのにあれこれ母さんは、歯磨きしたか、勉強したか、明日の準備はとか、もう口うるさくて嫌になるくらいだけど。やっぱり優しくかったし、僕もなんだかんだ言っただけじゃなかった。……父さんはもうちょっと何かやれよと思うけど」

「うん、家もそんな感じ」

「そんでさ、やっぱり僕が帰らないと心配とかしていると思うんだ。でも……」

「うん」

「でもさ、本当にあいつが言ってたみたいに帰れなくて、本当に友達とバトルロワイヤルをやるくらいだったら、別にいいかなって思っ
って……もしかしたら薄情かな」

「……そんなこと、ない、と思う……」

「結構さ、うちのクラスそんな仲悪くなかったし、時々バカやりたりして、まあ今現在非常に恨みというか、出会ったら一発殴らせる的な感情を抱いていないわけでもないけども」

「……」

「所詮、いつか子供は親元を旅立っていくというわけで。まあちよつとどころでなく親には申し訳ないけれども、友達殺してまでして帰ったら、それはそれで顔向けできないし」

「そう、だね……」

「だからさ、もういいんだ。目標は頑張っ
て生きる。結局これいいんじゃないかな」

「うん……!」

僕は起き上がった。

「ここがどんな世界かは知らないけれども、きっとどうにでもなる。そう信じて。」

「一緒に行こう、小野崎さん」

そして僕は、彼女に手を差し出した。

墜落（後書き）

ここから先は完全な蛇足なので読まなくとも結構です。
趣味が合う方だけお読みください。

小説・・・といって、何を思い浮かべるでしょうか。
私の場合、5年前は外国作家さんが書いた大判で売ってるような
ファンタジーものでした。

3年前は、ばりばりラノベを読んできました。

最近はこのことか、二次創作サイトとかをよく回っています。

そして現在は、SFなど。

まあ、ちよつと時間が過ぎれば嗜好も変わります。

ということ、現在の嗜好を含めてSFにしようかと思つた時も
ありました。

まあ、SFといつてもいろいろありますけど、私は宇宙を舞台に
したものが好きです。

でも、分類でSFが入っていないように挫折しました。

なぜかという、例えば直径10kmの宇宙コロニーで地球表面
の 9.8 m/s^2 の加速度を発生させようとすると142秒に1
度1回転させる必要が出てくる。無理だろ。ならば100kmのと
き、448秒に1回転。え、10分もしないうちに直径100km
の構造物を1回転させると。ならばマイクロブラックホールを仕込
んだ人工天体なら・・・とか、まあ、ここまで書けば今どんな本を
読んでるかお分かりでしょう。こんなの書けません。

そこでと言つていいのかどうか、すでに世界観が存在している二
次創作に手を出したわけです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4233o/>

ネギま！な世界で

2011年10月6日06時21分発行